

荒谷 卓(あらや たかし)  
生年月日:昭和34年秋田県出身  
略歴:昭和53年東京理科大学、陸上自衛隊に入隊、第19普通科連隊、調査学校、第1空挺団、第39普通科連隊、陸上幕僚幹部防衛部、防衛局防衛政策課戦略研究室等に勤務。平成16年特殊作戦群初代群長に就任。平成20年依願退職(1等陸佐)。  
海外留学:ドイツ連邦軍指揮大学及び米国特殊作戦学校。  
平成21年9月~30年10月、明治神宮武道場至誠館館長。  
平成30年11月三重県熊野市に「国際共生創成協会:熊野飛鳥むすびの里」設立、代表を務める  
著書:「戦う者たちへ」並木書房 / 「自分を強くする動かない力」三笠書房 / 「サムライ精神を復活せよ」並木書房  
熊野飛鳥むすびの里のHPアドレス  
<https://musubinosato.jp/>



# 日本の戦闘者

国際共生創成協会 熊野飛鳥むすびの里  
代表: 荒谷 卓



## サムライ

日本の戦闘者の呼び名として、一般的なのは「武士」だろうか。「武士」というのは、天皇及び天皇の認証する武家の棟梁から認められた武装官人である。武家の棟梁とは、天皇の子孫でありながら、日籍降下した「桓武平氏」や「清和源氏」等であり、これに仕える家族的共同体の成員が「武士」である。これら武家棟梁と呼ばれる「平氏」や「源氏」は、10世紀に生存した平高望、源経基等を祖とする。

武士以前の日本の戦闘者は、天皇から「朝臣(アソノ)」や「宿禰(スクネ)」という姓を与えられていた。「朝臣」や「宿禰」は、たいへん高い官職で、後の「武士」と同じ様に天皇に命じられて、軍事・治安のみならず政治、司法、行政も司っていた。

第16代仁徳天皇(即位313年)から、第38代天智天皇(即位661年)が白村江の戦いで敗れて朝鮮半島から後退するまでの間は、日本は朝鮮半島に統治権を有していたことは、中国南朝の「宋書」東夷伝(倭国条)に記されており、第19代允恭天皇(相違412年)は、宋から「特使節都督倭、新羅、任那、加羅、秦韓、慕韓六国諸軍事、安東大將軍」の称号を授けられたとある。この頃の朝臣、宿禰と呼ばれた日本の戦闘者は、外交、戦争、海外統治等の国際政治も任されていた。

この「朝臣」や「宿禰」の戦闘精神を受け継いだのが武士であり、武士道という日本の思想・哲学は、武士が生まれる以前から存在した。

ところで、よく武士道と騎士道が比較されることがあるが、両社は根本的にその性質が異なる。

西欧の騎士道は、教会が軍隊を保有するに際し、奴隷の戦闘者に対して、騎士の名称と

引き換えに宗教道徳律を強要したものである。

例えば、「不動の信仰と教会の教えへの服従」や「我らの信仰心と良心を抑圧・滅失しようとする異教徒に対する不屈の戦い」等というものだ。つまり、騎士道とは、雇用者から与えられた他律的規則である。

これに対して、日本の武士道は、自律的に確立する道義規範である。宮本武蔵の「独行道」に曰く「世々の道をそむく事なし」「よろづに依怙(他を頼む)心なし」「身をあさく思い世をふかく思ふ」云々、山岡鉄舟の「修身二十則」に曰く「嘘を言うべからず」「君の御恩忘れるべからず」「父母の御恩忘れるべからず」「食する度に農業の艱難をおもうべし、草木土石にても粗末にすべからず」云々、楠正成の「壁書」に曰く「君の爲に身を捨つるを忠と云ふ」「儉約を専(もっぱら)とし奢(おごり)を慎み、人の非を見て我身の行を正すべし。我、愚なる故に壁書して慎とするのみ」云々等だ。

だから、騎士道は、雇用者である教会と貴族が、革命によって軍権を失うと同時に一瞬にして消滅した。しかし、武士道精神は、その自律性故に武士がいなくなっても継承された。このような自律した道徳規範を以て自らを厳しく律する武士道精神は、今や国際的に高い評価を得、フランス等では青少年教育に取り入れられている。

日本の戦闘者の社会的地位が、歴史的に高位にあったのは、「武士道」のような高い道徳規範を身につけ、我が身を犠牲にして「世のため人のために力を尽くす」ことを武人の道としたからだ。

ただし、公の権利を与えるのは常に天皇である。明治の時代、帝国陸海軍の統帥権を天皇が持っていたが、これは日本の歴史では当たり前のことである。征夷大將軍も、関白も、

執権もすべて天皇から与えられる職権である。

これに反するものは逆賊と呼ぶ。

天皇に仕える戦闘者をよくあらわす言葉に「侍(サムライ)」がある。「侍」の言葉の起源は、日本書紀の神代の中に記されている。「天照大神、天兒屋命(あめのこやねのみこと)・太玉命(ふとだまのみこと)に勅(さ)すらく、惟(ねが)はくは、爾(いまし)二神、亦(また)同じく殿(みあらか)の内に侍(さむら)ひて、善く防ぎ護ることを爲(な)せ」と。

天照大神が、天孫降臨に同行する天兒屋命・太玉命に対して、天皇の防護の任務を与えた際に、その職能を「サムライ」と勅したのである。

そして、天兒屋命の子孫である中臣鎌足は、この任務があったからこそ、天皇の地位を奪おうとする蘇我入鹿を誅殺した。

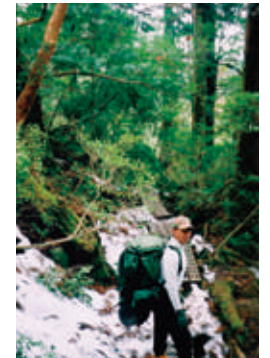
我が、鹿島神流は、同じく天兒屋命の子孫である鹿島神宮神官の國摩真人(くにまつのまひと)が、武甕槌命(たけみかづつのかみ)の祓(はら)い「鹿島の太刀」を「神妙剣」として顕現したものである。鹿島神流の目的とするところは、「倒敵破邪の愉悦を好むものに非ず。天下御治召し給う大御心に副(たす)け奉る」



グリーンベレー留学時の写真(ジャンプ)。



空挺レンジャー教育時の写真。



の士を培うに在り)。つまり、天皇の大御心を守護する日本の戦闘者を育成することが目的なのである。

最近では、「サムライ・ジャパン」とか、チャラい印象がある「サムライ」という言葉には、実は、日本の戦闘者としての本質的意味が込められているのだ。

現在の自衛官は、他の公務員と同様、自衛官に任命されるときに「服務の宣誓」をする。これは、西洋の騎士の儀式的模倣である。法規に書かれてある文言、すなわち、雇用者から与えられた規範を復唱して自衛官に任官する。そして、思想や活動を厳しく監視制約され、命令が来たら命をかけて戦えと言われる。まさに奴隷的戦闘者である。これでは日

本の戦闘者とは言い難い。さらに戦後、天皇と自衛官との絆は断たれた。自衛官は、国家の戦力でありながら天皇から認証されない。天皇に認証されない国家の戦闘者集団は、日本の歴史ではじめてのことだ。

かくのごとく、現代の日本国民は、日本人としての歴史を記憶から消し去られ、外来思想に侵され何の疑問も持たずに暮らしている。外来種と化した日本国民の中からは、世界最強の日本の戦闘者は生まれてこない。

もし、日本の戦闘者で在りたいのなら、まずは、失った日本人としての歴史の記憶を取り戻し、自分が何者であるかを自覚することが大切である。



2006年にフロリダで開催された「国際特殊作戦部隊会議」にチェイニー米国副大統領が参加した時のニュースで、私は、日本代表として前列2列目向かって右から5人目に写っている。



グリーンベレー留学時の写真(射場)。



グリーンベレー留学、卒業式の写真。